



金子光晴の  
『かつこう』の詩



記憶を記録に・  
切り抜き帳Ⅲ

石下郁子

写真集『奥日光戦場ヶ原』の中に、金子光晴の『かっこう』の詩の一節を書きました。  
あれから、ふと詩の題名のこと気がなってその詩のことを調べてみました。  
kakkouとローマ字でキーをたたき変換すると《カッコウ》とカタカナ表示されたので、そのまま『カッコウ』という題名にしていたのですが、ひらがなかも知れないと気がなったのです。

調べてみると題名はやはり『かっこう』が正しかったので訂正しました。

金子光晴の作品はまだ著作権の保護期間内で、通常全文の表示はできないとされていますが、偶然その詩にたどりつくことができました。それを読んでみて、自分が暗記していた詩との違いに気が付きました。

また別のところでも『かっこう』の詩に感動したという人が書いたブログに行きつきました。  
そこにやはり全文が出ていたのですが（こういう形での掲載は認められていると思います）詩文は前の文章と同じで、私の記憶には抜け落ちているかなりの部分がありました。

次が私が記憶していなかった所です。

『僕の短い生涯の  
ながい時間をふりかへる。  
うとうとしかった愛情と  
うらぎりの多かった時を。』

『別れたこひびとたちも』

『とりかへせない淋しさだけが  
非常なはやさで流されてゐる』

また私が暗唱していたのは、自分が勝手にそうしてしまったものなのか、今回読んだより韻文調で、流れるような文体でした。

詩歌に限ってはいつも2、3回読むと覚えてしまいましたが、それは自分の好きなところだけだったり、文言もいつしか自分流に変えてしまっていたのかもしれない。

『霧煙り』を（煙り）と覚えていたり 『みぢんからできた水の幕』が（みじんになった水の幕）だったり、かなづかいは別としても小さな記憶違いをいくつか発見しましたが、そんな中で『別れたこひびとたちも』という言葉は、以前とは違っているのではないかという思いを持ち

ました。

それはこの詩が、当時の中学国語の教科書に載っていたものだったからです。その一行はもっと差しさわりのない言葉として記憶していました。

言語に対しては今よりもっと厳格で、児童、生徒の心も幼かったあの頃、『こひびと』などという言葉が教科書に載るはずがないと思えたからです。多分、教室中がざわついて授業になりません。

そんな時代でしたが、それとも当の私が鈍感で『こひびと』という言葉に反応しなかったのか……

この話を友人にしたら「書き換えられることもあるでしょう『麦畑の歌・Commin thro' the rye』もそうだから」と元音楽教師の彼女は言っていました。（私とは同年ですが、他県出身の彼女には『かっこう』の詩の記憶はないそうです）。

私とその詩に出会ってから十数年後に世を去った詩人。

詩人は正確に言葉を紡ぎ、生涯をかけて『かっこう』の詩を完成させたのか、あるいはまったくの私の記憶違いだったのか、疑問が残りました。

現代に残されている詩は、自分が覚えていたものとは違っていたため、最初多少の違和感を感じましたが、何度か読むうち新しい詩の方がよりの確に状況が表現されていると思いました。

もしかしたら自分の憶え違いではないかと心配だった『みつみつとこめる霧』や『霧の大海のあっちこっち』の文言は、記憶のままだったのですね。

昔読んだ教科書や雑誌や物語には限らない郷愁を憶えています。

もうかなわないことですが、それらひとつひとつを手にとって読んでみたいと思うことがあります。そこにはきっと、その後の人生を歩むことになった足跡のいくつかがあるのかもしれない。

また、自分ではそう思わず意識の底に根付いたものと、あるいはまったく見落としていたものに気づくことができるかもしれません。根気よく探せば、そのうちのいくつかは見つけられるのではないかと、そんなことにこれからの時間を使ってみたい気がしました。

## 『かっこう』

金子光晴(1895~1975愛知県生まれ)

しぐれた林の奥で  
かっこうがなく。

うすやみのむかうで  
こだまがこたへる。

すんなりした梢たちが

しづかに霧のおりるのをきいてゐる。

その霧が、しずくになって枝から  
しとしとと落ちるのを。

霧煙りにつついてゐる路で、  
僕は、あゆみを止めてきく。  
さびしいかっこうの声を。

みぢんからできた水の幕をへだてた  
永遠のはてからきこえる

単調なそのくり返しを。

僕の短い生涯の  
ながい時間をふりかへる。  
うとうとしかつた愛情と  
うらぎりの多かつた時を。

別れたこひびとたちも  
ばらばらになつた友も  
みんな、この霧のなかに散つて  
霧のはてのどこかにゐるのだろう。

いまはもう、さがしようもない。  
はてからはてへ  
みつみつとこめる霧。  
とりかへせない淋しさだけが  
非常なはやさで流されてゐる。

霧の大海のあっち、こっちで、  
よびかはす心と心のやうに、  
かっこうがないてゐる。  
かっこうがないてゐる。 . . . . .

## 著作権の制限[編集]

著作物の利用や使用について、その便宜上必要とされる範囲または著作権者の利権を害しない範囲において著作権が制限されることがある。

(著作権法32条 引用)

公表された著作物は自由に引用して利用することが出来る。ただし、それは公正な慣行に合致するものであり、かつ、報道・批評・研究その他の引用の目的上正当な範囲内で行われるものでなければならないとされる。

## 金子光晴の『かっこう』の詩

<http://p.booklog.jp/book/77460>

著者：石下郁子

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/thmo2535/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/77460>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/77460>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ